

ゲルショム・ショーレム 「更新」から「全体性」へ

Gershom · G. Scholem Von der “Erneuerung” zur “Ganzheit”

博士後期課程 独文学専攻 1995年度入学

石 原 竹 彦

Takehiko ISHIHARA

序

ユダヤ神秘主義、カバラーの研究で名高いイスラエル人ゲルショム・ショーレム（Gershom · G. Scholem 1897-1982）はその青年時代を第一次世界大戦期のベルリンで過ごした。当時のドイツでは多くのユダヤ人青年がドイツに同化した自分たちの両親の世代に反発し、シオニズムに触発されたばかりの青年組織（特に Blau-Weiss）に所属していた。ショーレムも例にもれずシオニストへの道を歩んだが、彼のシオニズムは同化世代と公的シオニズム、ユダヤ人青年組織を批判するかなり過激なものへと成長していった。

戦争の勃発はショーレムの抱いていたシオニズムの理想を完全に打ち砕いてしまった。公的シオニズムが戦争に対し肯定的な態度を示し、その結果ユダヤ人青年の多くがシオニズムの名のもとにドイツの戦列へと加わったからである。彼はここにはっきりとシオニズムの後退を看取り、盲目的にシオニズムを叫ぶだけのユダヤ人青年の楽観主義と彼らの思想上の指導者を非難した。

本論の目的は若き日のショーレムが公的シオニズムとの確執を通じて自らのシオニズム思想のプログラムを確立するに至った思想上の発展を確認することにある。具体的には1914年の『旅の観察と旅の思考（*Reisebeobachtungen und Reisegedanken*）』（以下、『旅の観察』と略す）から1917年の『ユダヤ人青年運動（*Die jüdische Jugendbewegung*）』に至る期間である。『旅の観察』は日記の刊行によって近年公開されたエッセイ風の記述で、1914年8月17日、スイスのゴットハルト峠に滞在した際に執筆されたものである¹⁾。当時ショーレムはまだ16才にすぎず、記述は心情の素朴な表明の域を出ない。しかし、当時のショーレムが「僕にとって価値のある唯一のもの」、「嘘などついてはいない Tb. 42」ものとしてその重要性を強調しているように、そこには生まれつつある彼の「更新」観と青年世代への要求と理想、そしてシオニズムへの純粋な情熱を認めることが出来る。

また『ユダヤ人青年運動』は1916年に草稿が書かれ1917年に「ユダヤ人」誌に掲載された彼の公

にされた最初のシオニズム関連の論文である。この論文は大きな反響を呼び、ユダヤ人青年運動として知られる Blau-Weiss に揺さぶりをかける切っ掛けとなった。ショーレムのシオニズム多数派およびユダヤ人青年運動への批判と論争は戦後も続いたが、それが目指すものはこの論文によってすでに示されていた。

しかし、こうした重要性にもかかわらずこの論文についての詳細な分析はこれまで行われてこなかった。初期のショーレムを扱った数少ない研究としては、デヴィット・ピアールの『カバラと反歴史』²⁾、ハンナー・ウァイナーの『ゲルショム・ショーレムと青年グループ ユング・ユダ 1913～1918年』³⁾、ジョージ・モーセの『ドイツ系ユダヤ人としてのゲルショム・ショーレム』⁴⁾等が挙げられる。彼らはショーレムの初期論文を時代順に追いながら、彼のシオニズム思想と公的シオニズムとの関係を歴史的に概観している。だが、そこにはそれぞれの論文を深く掘り下げて考察するという姿勢は認められない。『ユダヤ人青年運動』もそうした扱いを受けてきた論文の一つで、それが導き出す結論が表層的に取り挙げられ、ショーレムがいかに過激かつ純粋なシオニストであったのかを例証するための材料の一つにされている。本論において私は彼らによって導き出された伝記的研究成果に奥行を与えるために『ユダヤ人青年運動』でのショーレムの主張を考察し、これまで論及されたことのない『旅の観察』との内的関連をそこに見出すつもりである。そしてこの論文の結論部に隠されたショーレムの思想の背景を追究したいと考えている。

『旅の観察』から『ユダヤ人青年運動』への思想の発展はそれぞれが中心的なテーマとするものによって「更新 (Die Erneuerung)」から「全体性 (Die Ganzheit)」への道程と名づけることが出来るだろう。戦争勃発当初、ショーレムの関心事はマルティン・ブーバーによって世に広められた標語「ユダヤ教の更新」の実現であった。しかし、戦争を賛美し戦列へとユダヤ人青年を誘うブーバーに決別した彼は、独自の路線を模索しなければならなかった。その際の彼のスローガンが「全体性」なのである。ショーレムは『ユダヤ人青年運動』執筆時に自らの思考過程よりこの概念を導き出した。当時のショーレムはこの概念を明確に定義付けておらず、そのためそこにはいくつかの視点が混在することになったが、彼は自らの主張の全てがこの概念の中に内包されていると確信していた。事実、後に彼はこの概念を彼のシオニズム観、及びユダヤ観の基盤を成すものへと発展させていく。この発展された「全体性」については次の機会に論じることとし、本論においてはそこに到達するまでの過程と『ユダヤ人青年運動』の中でこの概念が果たす役割に限定して考察していくことにする。ここではまず始めに『旅の観察』に目を向け、『ユダヤ人青年運動』へと成長していく彼のシオニズム思想の萌芽を確認していきたいと思う。

1 『旅の観察と旅の思考』ショーレムの更新観

ショーレムはゴットハルト峠の自然の雄大さと孤独さから『旅の観察と旅の思考』を書くための靈感を得た。彼は自然の豊かな形象と詩的な言語の力を借りて体系づけ難い自らの内奥をここに浮かび上がらせる。それらは普段からショーレムの中に眠っていた要素であるには違いないのだが、今、神

の自然に触れた純粹な喜びに際しそれらは一斉に目覚め、怒涛の如く流れ込み、再びもといた場所へと消滅していく。彼はそれらの断片をひとつひとつ吟味し、論理的な関連のなかに秩序立てることもできず、ただ、思考が生成し消滅するまでの瞬間を捕らえて書き置くことしか出来ない。確かにここに書き留められた瞬間の生成物は、山を降りた後、自らの解釈によって思考と呼ぶにふさわしい直線的な体系にまとめあげられるに違いない。だが、山を降り、山々の靈感を忘れた者は、そこに存在したはずの生命の躍動感をもはや感じ取ることは出来ないだろう。ショーレムは言う。「思考の本質とは、ひとえに生成と消滅の束の間、その至福の体験（Erlennis）の永遠なる瞬間である Tb. 28」と。

ショーレムはゴットハルトの山中での体験を通じて精神的な「更新」が自らにもたらされたと確信していた。「更新」とは本来1911年に出版されたブーバーの講演集『ユードントゥームについての三つの講演』⁵⁾の中で、ブーバーが彼の「精神的シオニズム」の目標として掲げた標語である。この標語を掲げたシオニストはもちろん他にも存在したが、当時の若いシオニスト達に最も強烈な衝撃を及ぼしたのはブーバーのこの著作であった。

ユードントゥームという語は一般に「ユダヤ教」と訳されているが、これは決して宗教的な事柄ばかりを表す用語ではない。むしろそれはユダヤ人としてのアイデンティティー、歴史を通じて形成されてきたユダヤ独自の民族性を指し示している。ドイツのユダヤ人の多くは自分たちがユダヤ人であるということは分かっているがそれがどのようなものであるのかを理解出来なくなっていた。そのためシオニストを称する若い世代はユダヤ人の証を、民族特有の精神的基盤の何たるかを知りたいと願っていた。彼らはブーバーのこの著作の中にその答えを見出したのである。ショーレムも一シオニストとしてこれを読み、ブーバーの語彙に陶醉し、熱狂的な彼の崇拜者になっていた。この著作の中でブーバーはイザヤ書の著者の例をとって「更新」の概念を説明している。要約するとそれは次のようなものである。

イザヤ書の作者は神によって新たに創造された天地を見た。だがそれは、実際に世界の装いが目に見える変化を起こしたわけではなく、イザヤ書の作者の身に精神の覚醒がもたらされたからなのだ。彼の身に初めから備わっていた忘れられた能力が、あるきっかけを通じて表出し統一に向かって集結する。その結果、自らと世界の本質は新しいものになり、世界が新たに誕生したように彼の目に写ったのだという。つまり「更新」とは神的な存在との直接の体験を通じて為し遂げられる精神の革命である。自らの内部に眠る不活性の領域は、こうした神秘的体験を通じて生き生きした現実へと高められ、人はそこに新たに創造された精神の世界を発見するのである⁶⁾。

『旅の観察』の中でショーレムは「山には神が住んでいる」と言っている。それは、「世界が我々にとってあまりにも重すぎるものだから、この世界の責任をすべて負わされてしまった神」ではなく「体験することの神（Gott des Erlebens）」、「方位を指し示す魔法を持った Tb. 36」神である。この神はイザヤ書の作者さながらにショーレムに精神の覚醒をもたらし、内在していた眠れる力は今意識の表層へと引き上げられ、『旅の観察』において不明瞭ながらも言葉の輪郭を与えられる。それは生に与えられた意味を教え、進むべき道を照らしたす思想という名の力へと集結する。

この体験によって彼は新たに世界を切り開く者としての自らの宿命をはっきりと意識した。「僕は僕自身のためだけにこの旅行をしたのではない。一千万人の（ユダヤ人の）ためにしたのである」と彼は書いている。『旅の観察』は、自らが体験した精神の奇蹟を山の下の方で待つユダヤ人共同体にもたらすという彼の決意表明なのである。精神の覚醒を共有し、自らに課された宿命を直視する共同体。この実現のために彼は自らの手になる新しい「更新」観をここに浮かび上がらせる。それは自然の観察から引き出されたいって素朴なものであった。

更新 (Erneuerung)。(…) 太陽は更新の象徴ではないか。被造物と世界。太陽はそれらを新たに創りだす。我々の手には古い一つの言葉がある。(…) それはこの様に語る。神は同じものを二度は創らないと。出来事の渦から新たにその兆候が立ちのぼる。素材は古いものである。しかし、印は新しい。だが、これが更新なのである。つまり、そこに存在するものは、唯一、一度きりのものなのだ。新たにそれは浮上する。存在したことのないものが。出産の洪水がその母体である。二度とくり返されることなく、それは洪水に沈み込む。(…) あらゆるものが現れ出る。それは変容している。だが、変容というものは、お前がそのものの額に失われることのない永遠なるものの印を貼りつけることなのであって、永遠に留まるものにすることではない。つまり、事物として大地の諸々の事物に加わり、星として天の星々に加わることなのである。Tb. 34

ショーレムは自然の雄大な摂理に「更新」の最良のモデルを見た。「体験の神」は太陽の形象を借りて描かれ、永遠は生成と消滅の無限の連続性に求められる。消滅は新たな生成の母体であり、この母体の中で忘れ去られた素材は太陽によって生命を与えられ、再び意味のある形成物として生み出される。その結果、古い素材は新しい印を手に入れ比類のない一度限りの生を享受する。

この自然観にはニーチェの永劫回帰の観念が色濃く現れているように思われる。実際この時期彼はニーチェの『ツァラトゥストラはかく語りき』を読んでいた (Vgl. Tb. 46)。しかし、自然の尽きることのない営みに神を見、また自らの内部にこの無限性に連なる内なる自然を発見し、あのイザヤ書の作者同様に神による「更新」の業を体験したと信じる時、このニーチェの自然からは精神の覚醒というブーバーの命題⁷⁾が紡ぎ出されるのである。

自然の観察からはなれ「更新」が人間世界へと向けられるとき、「更新」は我々一人ひとりにある課題を課す。引用部後半に突然あらわれる「お前」に対し、ショーレムは「そのものの額に失われることのない永遠なるものの印を貼り付けること」を要求する。自然の摂理に従うと、永遠にそこに留まり続けるものは存在しない。だが、新しく生み出された創造物はいずれも古き素材によって構成された自然の「更新」の産物なのである。現代のユダヤ人たちは精神的に本来あるべき歴史の流れから逸脱してしまった。瞬間を生きる個々のユダヤ人は自らの内側へと目を向けて遥かな過去より受け継がれてきた「永遠なるものの印」を見出さなければならない。これによって現在を生きる個は歴史の中で果たされなければならない自らの使命を認識する。彼は初めて真正な歴史の一部として瞬間に横

臥し、過去と未来の掛け橋となるだろう。

では一体ユダヤ人にとって額に貼りつけるべき「永遠なるものの印」とはどのようなものだと考えられるのだろうか。これについて『旅の観察』のショーレムは具体的なことは何も述べていない。だが、これには二つの可能性があるように思われる。というよりこの二つの漠然とした混合体が当時の彼のユダヤ観を形成していたように思われる。一つはブーバーの著作から得た知識であり、もう一つは彼自身の体験から導き出されたものである。

ブーバーは『ユーデントゥームについての三つの講演』の中でオリエント特有の「宗教性 (Religiosität)」というものに言及している。「宗教性」は西欧の「宗教」に対立する概念で、復活せられるべきユダヤの本質的民族精神を表している。この概念を説明するためにブーバーはユーデントゥームを特徴づける三つの理念、つまり統一の理念、行為の理念、未来の理念⁸⁾を個別に扱っているのだが、ショーレムはとりわけ統一の理念を構成している「憧れ (Sehnsucht)」という概念に強く引き付けられていた。

ユダヤ人は他のどの民族にもまして内的世界の分裂を意識していたとブーバーは言う。彼らにとって外的な世界の諸問題はこの内的な矛盾の反映に過ぎなかったので、世界の統一は真っ先に自我の内部で実現され得るものと理解されていた。人間と世界が神聖なものではなくなり、互いに引き離され個別化の道を歩まなければならなくなったとき、いかなる分裂も知らない超越神は引き裂かれ、個々の内部へと離散してしまった。それ以来、我々の内的世界は善と悪の二元論に悩まされることになった。ユダヤ神教はこの内部分裂を克服し、世界の統一を為し遂げようという民族の「憧れ」を土台に成立した。ユダヤの「宗教心」は絶対的なものとの生きた関係を打ち立てようとするこの Sehnsucht の表現である。ラビと祭司たちのもとでユダヤ教が形式の宗教となり、生ける神が単なるシェーマと化しその生命を失ったときでさえも、このユダヤの Sehnsucht は神秘的な潮流として常に歴史の地下層で生命を保っていた。そして時代の要請に応えしばしば表層へと現れ、幾度かのユーデントゥームの最盛期を形成してきた。

現代のユダヤ世界はこの Sehnsucht を見失っている。だが、「Sehnsucht はまだ死んではない」。絶対的なものへの民族の渴望心を取り戻すことによってオリエントの「宗教心」は現代に蘇り、停滞していたユダヤの精神史は再び過去と連結するであろう。ブーバーはこの「宗教心」の再生を「ユダヤ教の更新」と呼んでいた⁹⁾。

ショーレムの「更新」観の大部分はこの Sehnsucht の概念とユダヤ的「宗教心」の復活に依存したものである。だが、ブーバーの読書以外にも彼にはユダヤ性の真髄に触れたと確信し得る体験があり、その体験がブーバーの語彙と観念にショーレムならではの生命力を与えているのである。それは習いたてのヘブライ語を駆使して初めてユダヤの原典に触れた際に彼が覚えた感動であった。彼の自伝によると1913年の4月、彼は彼のヘブライ語教師の手ほどきでタルムードに記された権威達の注釈を読むことを学んだ。その時、彼は初めて伝統の中のユダヤの実体に出会ったと感じたのだと言う。何千年にも渡るユダヤ史を通じて滞ることなく繰り広げられてきた世代間の対話と、伝承を今日

に至るまで伝えてきたある種の誠実さに彼は心を打たれたのであった¹⁰⁾。神秘主義の研究を続けるうちにユダヤの実体へのこの確信は次第に異なったものになっていったと自伝は語っているが、1914年の時点ではこれはなおも生きた体験であったに違いない。タルムードの中で聖書の一節の解釈を巡って真剣に繰り広げられる歴史の権威達のひたむきさに失われたユダヤの Sehnsucht を見出し、今日まで受け継がれてきた伝承の連続性に「永遠なるものの印」を予感したのではなかろうか。ユダヤ人としての真の自覚を取り戻し、「憧れ」の力を借りて意識の根底に眠る民族の遺産に触れたとき、ユダヤ人一人ひとりには「憧れ」が織り成す民族の永遠の営みに加わることができるのである。それがショーレムの言う「事物として大地の諸々の事物に加わり、星として天の星々に加わること」なのではあるまいか。

生きたユダヤ性に触れたと信じるこの青年にとって、彼が支持していたシオニズムはかつての情熱を失い、妥協によって延命された同化世代の自己欺瞞の世界へと再び埋没してしまいそうに思われた。1912年以来彼はユング・ユダ¹¹⁾というシオニズムを支持する青年組織に所属していたが、そこで彼ははやくもシオニズムの後退を身をもって体験していた。1915年5月22日の日記の中でショーレムは次のようにこの体験を回想している。

最初のうち、探究するこの哀れな若者の目には参加者のほとんどが日常を超えた天の高みに立っているように思われた。彼らは純粹に理想主義者であるかのように思われた。(…)だがすぐにそこには探究などないし、それ故、発見もないことに気がついた。参加者の多くは年を取るにつれて、自分たちの貯蔵庫の中でシオニズムを今にも黙殺してしまおうとするあの商売人根性を我が物とした。彼らには思慮分別が付き、ブーバー主義者のショーレムを笑ひ者にし始めた。始めは彼の聞こえないところで、しだいに彼がいるときであっても、友情や以前の理想を憂慮することなく。傷つけられた青年は驚いた。そして彼がこの者達の魂の欠如をも見抜いたとき、彼は旅立ちシオンへの自らの道を歩んだ。Tb. 117

戦争勃発後ユング・ユダはショーレムの手によって改革され、中欧で最も過激な反戦グループの一つへと成長することになる。しかし、それ以前にはこの日記に見られるようなありさまで、ショーレムにとって全く魅力のない組織に落ちぶれていた。それは彼らが年を取るとともに聞き訳の良い人間になってしまい、妥協を通じてより良い環境を手に入れるための「思慮分別」を身に付けてしまったからに他ならなかった。そのようなときショーレムはブーバーの思想に触れたのだった。ユダヤの「宗教心」が何であるのかを彼は理解出来なかったかもしれないが、等しくユダヤ原典に向き合うものとして夢想家ショーレムは、ブーバーの語る神秘的文体と語彙に共感を覚えたのであろう。

そして今、魂の欠如した下の方の世界を離れ、山での体験によって彼は自らの意識の深みに失われた民族からの要請を、彼の全存在を貫く一本の道を見る。それは戦争を通じて変わることのない彼のシオニストとしての道である。自然の靈感は主義と思想をまとったシオニストへとショーレムを「更

新」し、彼の額に救いの啓示をもたらす救世主の印を貼り付ける。彼は孤独と危険の渦巻く山中で神の声を聞いたモーセの道程を再現し次のようにシオニスト達に呼びかけた。

己の孤独な道程に神を探す君たちよ。この言葉（神がモーセに語りかけた言葉）を聞け。岩の斜面や雪の平原の荒涼とした石の原をさまよっているとき。神を探せばどこでも神に会えると思え。だから靴を脱げ。君たちを押しつける全てを。あらゆる中途半端さや妥協を自分たちからかなぐり捨てよ。君たちの道中分かたれることなく一体であれ。容赦のない厳しさの精神により（Mit dem Geiste rücksichtloser Strenge）自らを更新せよ。 Th. 36

この一節にはブーバーの著作には見ることの出来ない厳しい要求が掲げられている。ユダヤ性の再建を目指すシオニスト一人ひとりがモーセを生きなければならない。この実現のためにシオニストたるものは「容赦のない厳しさの精神」、危険と孤独を貫通しようとする強靱な意思と勇気、あらゆる妥協を振り払い自らに宿る自然へと回帰する決意を持たなければならない。「更新」を実現する自身の神との出会いは、山での特殊な体験がショーレムにとってそうであったように、瞬間の生成物に過ぎない。日常生活を営む自我は再びこの体験を忘却の深みへと押し戻そうとするだろう。しかし、この精神によって自らを「更新」し得た者は決してこの体験を逃さない。彼は自らの内に常に危険と孤独の山を持ち、「神を探せばどこでも神に会える」のである。

これが『旅の観察』でショーレムが主張する最終的なメッセージである。ここで強調されている「容赦のない厳しさの精神」とはショーレムに備わっていた反体制的な気質と同一のものであるように思われる。彼は多数派から孤立し未来への危険へとひたすら突き進む自らの生き方と精神を正当化し、シオニズム遂行の絶対条件にまで高めたのである。たとえブーバーがすぐれたシオニズムの理想を提供していたのだとしても、それを実現する前提を当時のシオニズムは見失っていた。民族精神の覚醒以前にまずは個々人のシオニストとしての覚醒が不可欠であるとショーレムはここで主張する。彼はその手本として山での確信を携え彼らの元へと降りていくのである。

『旅の観察』の中でブーバーの「更新」という語彙はもっぱら彼が直面している問題に対して柔軟に解釈されている。だが、それは非難し難いことであろう。彼がブーバーのユダヤ観を把握しそれに文献学的見地から批判を加えることができるようになるのはずっと後になってからであったし、この当時そのようなことができる学者は決して多くはなかったからである¹²⁾。

晩年に書かれた彼の自伝には『旅の観察』の存庄については何も触れられていない。どうやら晩年のショーレムにとって具体的な方針を掲げることなく、ブーバーのユダヤ理解に深い信頼を寄せるこの時代の記述はさして価値のあるものではないように思われたのかもしれない。しかし、1914年の8月、16才の青年がすでにシオニズムの腐敗を痛感し、ユダヤ性を追い求めることのみに

関心を持つ誠実なシオニストの必要性を主張したということは注目に値することである。

1914年の秋、それまで平和主義者であったブーバーは強力な戦争賛美者へと転じ周囲を驚かせた¹³⁾。ショーレムはこの年の12月にブーバーの転身を目の当りにし、1915年の初頭以来ブーバーと彼を支持するユダヤ人青年運動に対し思想上の戦線を張ることになった¹⁴⁾。彼はユング・ユダの指導的立場に付き、その機関紙 *Die Blau-Weisse Brille*¹⁵⁾ 上でブーバー本人と彼のシオニズムにつき従う青年組織を強烈に批判し始めた。

2 『ユダヤ人青年運動』 「全体性」としての青年運動

『旅の観察』から二年あまりが経過した1916年6月28日、ショーレムはすでに戦争への考えを改め始めていたブーバーに手紙を送った。そこで彼は「生きたユーデントゥームの促進に貢献しなければならない事柄としてここに私の論文を送ります。この論文の起草に私は一年半を必要としました。というのもこの論文は、私が考え、しようと試みたことを含んでいるからです Br. 37」と書いている。ここで登場する論文が翌年にブーバーの編集する「ユダヤ人」誌に掲載された『ユダヤ人青年運動』の初稿である。この論文を書き上げるために一年半を要したという意気込みからも分かるように、それは1915年の1月からその時点に至る彼のシオニズム批判の項点を成す思想上の成果であった。

現在この初稿は我々の手元に残ってはいないが、日記の記述からおおよそそれがどのようなものであったのかを知ることが出来る。というのもショーレムはまず日記上でこの論文の草稿を書き上げ、それをもとに初稿を仕上げているからである。草稿の成立時期は1916年6月10日から28日までの期間で、草稿と「ユダヤ人」誌に掲載された稿を比べると内容的にはそれほど変わらないものの、分量は掲載稿のほうがかなり圧縮された形に仕上げられている。戦時中の検閲を通過するために掲載稿では戦争に関する記述が削られ、そしておそらく紙面の都合かなにかで分量も調節されたのであろう。したがって掲載稿を考察する際に必要と思われる箇所にあたっては草稿へと目を向けることにする。

『ユダヤ人青年運動』は「近年、そしていまこの時点においてさえもなお我々のもとにはいかなるユダヤ人運動も存在しない。ユダヤ人としての青年によって認知され、担われているような運動は存在しない。」という意表を突いた宣言によって開始される。「運動」と呼ばれる組織は存在するものの実際のところそれらの組織には「全体性や精神や偉大さ」といった本来の運動が持っているはずの「運動の証 (Insignien)」が欠けている。彼らはこの「運動の証」を手に入れようと躍起になっているが、それは矛盾した行為のようにショーレムには思われた。もし彼らが本物の運動であったならばそうしたものは運動の前提として彼らの手中に初めから収まっていたであろうからである。つまり「そうした組織の中で無益に探し求められているものは (…) 常に運動そのもの」なのである。(Vgl. Tb. 513)

これに比しショーレムにとって「ヘルツェルの思想が生命と形態を保っていたシオニズム運動の初期」は内容のあるユダヤ人運動が存在した唯一の時代である。彼は現代シオニズムの再建者ヘルツェルの政治的シオニズムに共感はしないものの、ユダヤ人国家の建設の実現に向かって一心に突き進ん

でいったこの時代の情熱を高く評価する。しかし時代の変化の中でいつのまにかシオニズムに与えられていた確固たる内容は失われ、明確な中心を持たない精神的混乱の時代が訪れた。もはや「彼らが語り、考え、行うことは全て幻のようなもの」になり、形骸化した組織のプログラムは個人々の「精神の欲動」に対してなんら影響力を持つことはない。いまこの瞬間にも青年たちが戦争に屈伏しているという事実はこの混乱の最終的な勝利を証明している。(Vgl. Tb. 513)

当時ドイツにはユダヤ人青年運動、もしくは青年シオニスト運動と称する組織がいくつか存在していた。その中でもここでのショールームに特に関わりの深い組織が Blau-Weiss である。19世紀後半、ブルジョワ主義的生活様式に反発した多くのユダヤ人青年たちは、同じ理由からドイツ人青年たちによって組織立てられていたヴァンダーフォーゲルに参加し共にピクニックを楽しんでいた。しかしこの組織内でユダヤ人を排斥しようとする傾向がしだいに高まり、これに対応して1912年にユダヤ人の手による新たなヴァンダーフォーゲル組織が誕生した。これが Blau-Weiss である。この組織は他のシオニズム青年組織同様ブーバーを中心とする文化的（精神的）シオニズムとの結びつきを強め、新しい運動の担い手としてドイツ・オーストリア全土に勢力を拡大していった¹⁶⁾。ユング・ユダには30人近いメンバーがいたが、その中にはこの組織にも籍を置く者が少なくなかった¹⁷⁾。前章の日記の引用に登場した「思慮分別」を身に付けたメンバーたちもこの組織に所属していたに違いない。ショールームのユダヤ人青年運動非難にはこうした個人的な次元を指摘することも出来るだろう。

ショールームにとって Blau-Weiss に代表される青年シオニスト組織はいずれも「混乱させる者と混乱させられた者 Tb. 514」のなれあいの集団でしかなかった。この状況を打破するためにここでのショールームは「運動になる Tb. 515」という課題を彼らに突きつける。彼は現在彼らの置かれた状況を「一つの運動の中ではなく、複数の団体の中にいる Tb. 516」ものとみなし、真っ先にその再統一を呼びかけるのである。「要求は本質的に一言で言い表すことができるし、この一言に則して発展され得る。それは全体性である Tb. 515」「我々は唯一の目標を掲げなければならない。あらゆるものを超越した目標を Tb. 516」「我々の道は全体性としてそして全体性の形態でシオンへと運動することである Tb. 515」

ここに登場する「全体性 (Die Ganzheit)」は『ユダヤ人青年運動』の中で最も重要な役割を果たす概念である。それは青年たちが「運動になる」ためには不可欠な形態であり、青年運動が孕むあらゆる問題がその実現によって解決され得るようにショールームには思われた (Vgl. Tb. 321)。基本的にこの概念は『旅の観察』の彼の更新観から導き出されたものである。『旅の観察』の中でショールームは「更新」の奇蹟をもたらすための心構えとして「君たちの道中分かたれることなく一体であれ (seid ganz ungeteilt auf euren Wegen)」と呼びかけていた。彼の更新観の一要素であるこの呼びかけは、その本来の母体を飲み込む形で発展し『ユダヤ人青年運動』の主要テーマとなる新しい概念をここに築き上げる。ショールームは自らが直面する現実への切実とした問題意識とより高度なものへと練磨されたユーデントゥームへの理解からこの呼びかけに新しい次元を付け加えより大きな思想の枠組みを導き出したのである。「更新」の概念は多次元的な構造を持つ「全体性」の最も基本的な層へ

と受け継がれこれを支えている。まずここでは『旅の観察』での彼の更新観との関連から「全体性」の基本概念を確認していこうと思う。

ショーレムは「全体性」の概念が持つ基本的なイメージを『旅の観察』さながらの素朴な比喻によって表している。それによるとこの混乱の時代、青年たちの生の流れはあらゆる方向に向かってばらばらに流れているのだという。一人一人の水流はわずかなものにすぎず、互いに分断された彼らの叫びは誰の耳にも届かない。だがもしそれらの流れが目的の統一によって一つに束ねられ、ダムに蓄えられるのであれば、そこからは必ずや運動という名の怒濤の滝が壁をつき破って出現するであろう。そして彼らの統一された叫びは人々の心を振わせるであろう。このために青年たちはシオンというシオニズム本来の目的に立ち返り、未来の建設者としての責任を背負わなければならない。(Vgl. Tb. 516)

もし神が家を建てなければ、建築職人たちは無駄に骨を折ることになるだろう。だが、もし彼らが苦心せず、彼らに任されていることを、彼らに可能なことをせず、ふんぞりかえって脇に引っ込み、すべきことは全てやったと思っているのであれば、神は絶対に家は建てない。Tb. 514f.

シオンの再建が将来必ずや実現されるという保証はどこにもない。それは神のみぞ知る事柄である。だが、もし彼らがこの目標の実現を疑い、これに向けられた内的な努力を無益なものとみなし排除してしまうのであれば、それとともに未来に残された微かな希望さえもが消え去ってしまう。現在、未来の建設への衝動を手に行っている者は数少ないが、ショーレムは自らがそうした者の一員であると確信していた。彼の目には運動の進むべき道が開かれており、故に今ここで運動の何たるかについて語ることを彼は自らの使命とみなすのである。彼はひたむきな建設への衝動を彼らに要求する。それは個々人の内に眠る「憧れ」の力に他ならない。

ある事柄は常に存在していたし(…)今日でももとのままそこにある。それは Sehnsucht である。(…)もし(我々の)生が Sehnsucht から生み出されずに、Sehnsucht が実りを結ばず、ユダヤ人の真の Sehnsucht から真実の献身が、つまりユーデントゥームの中へと入り込むという献身が生まれないのであれば、Sehnsucht は永遠の死神の手に落ちてしまう。Tb. 513f.

ユダヤ人としての Sehnsucht は青年たちの心の奥底で今でも生命を保っている。問題はそれに手を伸ばし、これによって未来を切り開くシオニスト精神を自らに呼び戻せるか、もしくはそうするための勇気を持ち得るのかということにあらう。『旅の観察』に現れた「精神の更新」というテーマがここに再び登場し、明確な形で Sehnsucht と結合する。1915年の一月以降ショーレムはシオニストを「憧れを持つ人(Menschen der Sehnsucht) Tb. 47」と定義し、この言葉によってシオニズム

の再生を語るようになっていた。それはブーバーの影響であるには違いないのだが、ショーレムの場合この語はもはや彼の言うような青年たちが立ち返るべきユードントゥームの隠された本質などではなく、シオンの再建を促進するために不可欠な運動の精神的基盤として描かれることになった。つまり Sehnsucht はもはや目的ではなく運動を生み出すための切っ掛けなのである。

『旅の観察』では個々人の精神的探求と自立に主眼が置かれていたのに対し、ここでの「全体性」への要求は個人的次元を越えた覚醒の同時性と決意の共有を強調する。かつての「容赦のない厳しさの精神」に加えてより切実に求められているものは「自己制限への、つまり一面性への勇気 (Der Mut zur Beschränkung, zur Einseitigkeit) Tb. 516」である。青年たちは Sehnsucht を忘却より救済し、「真実の献身」を、目的の実現のためならばいかなる自己犠牲をも厭わないという決意をそこから導き出さなければならない。さらに青年たちは、現実に関わりかけ未来に向かって行進する期待されたユダヤ人青年運動を誕生させるためにこの自己犠牲への決意を共有しなければならない。運動の「全体性」は『旅の観察』から発展した青年個々人の精神的努力の産物なのである。

しかもショーレムはこの「全体性」の実現を戦争の混乱期にあつて早急に為し遂げられなければならない課題であるとみなす。「Sehnsucht は永遠の死神の手に落ちてしまう」という言葉に集約されているように、今もしそれが迅速に為し遂げられないのであれば、建築職人である青年たちに運動の再建の機会とは二度と巡って来ることはないであろうと彼は予見する。この危機感が故に多くの者が信じて疑うことのなかった権威的秩序に彼は攻撃をしかけたのである。

しかし現実問題としてこの理想の実現は大きな困難に直面していた。この論文が掲載されたとき青年組織の指導者の中には彼に共鳴した者が少なからずいた。にもかかわらず公的シオニズムはこの危機的な時代においてさえもこれを実現する力を持ち得なかったのである¹⁸⁾。ショーレムは公的シオニズムの弱点と腐敗の原因を次のように分析し、そこから現実に関与した解決策とより高度な「全体性」の概念を導き出している。

現在の危機的状況へと青年シオニズムを墮落させたことへの責任は主に青年たちが所属する組織の指導者たちの側にあると彼は考える。指導者たちは運動の存続に責任を負ったとき、シオンという唯一の目標を掲げることに抵抗を覚えた。彼らの目標は常に「シオンと何か (Zion und irgend etwas) Tb. 516」、シオンとそれと同等の価値を持つと考えられる何かしらの事柄に設定されている。その何かとは様々な可能性があるかと思われるが、ショーレムは「数の理論 (Zahlentheorie) Tb. 516」と呼ばれるものをそうしたものの一つとして挙げている。それは多数派である平均的な存在を尊重し、極端な方針によってこの平均化した者たちの生を脅かさないための政策であった。『ユダヤ人青年運動』の中でショーレムが「外部にいる者」と言うときそれはこの平均化した多数者を表しているのである (Vgl. Tb. 322)。

いたるところで我々には異議が申し立てられている。外部にいる者を脅かしてはいけないという異議が。なんてむちゃくちゃな論拠であろうか。(…) すべてが外部にいる者の回りをまわっ

ている。全てのものが、思慮分別を手に入れた運動のあらゆる息づかいとあらゆる労働が彼らに都合良く裁断されている。Tb. 515f.

反ユダヤ主義的感情はドイツ社会から完全に消え去ることはなかったが、大抵のドイツのユダヤ人は日常生活において市民的な自由を手に入れていたし、それなりに安定した生活が保証されてもいた。このような時代にあって平均的なユダヤ人たちは、たとえ彼らがシオニストであったとしても、この良好な関係を積極的に解消したいなどとは願わなかったし、この快適さを犠牲にしてまでも理想の実現のために戦おうなどとも思わなかった。人々にとって「自分自身に完璧な要求を突きつけることは不快なこと Tb. 515」でしかない。これに対してシオンへのショールームの情熱には功利的な動機は一切働いてはおらず、彼のシオニズムは誰の目から見ても純粋なものではあったが、そのために彼が余計な苦難を背負い込まなければならなかったことも確かである。父親との不和、放校処分¹⁹⁾、シオニストサークル内での孤立など一般の青年シオニストには無縁であるような大きな代価を彼は支払ってきたのである。

組織の指導者たちは、彼らの支持者たちにショールームと同様の自己犠牲を要求することがシオニズムの存続を危うくするであろうことを十分に認識していた。それ故彼らはシオニズムを存続させる代わりに、本来のシオニズムが有していた自己犠牲の要求を事実上破棄してしまう道を選び取ったのである。つまり青年シオニズムは、実質的にはシオニズムとは呼びがたい集団へと自らを変質させることによって、無害なユダヤ市民と青年たちの支持を獲得し得る組織へと成長することが出来た。ショールームに言わせるといわゆるユダヤ人青年運動の存続はこうした逆説的な基盤の上に保証されているのである。そして指導者たちのこの「戦略 (Taktik) Tb. 515, 516」的な物の考え方は組織の構成員である青年たちへと受け継がれる。『ユダヤ人青年運動』の草稿は次のように述べている。

我々が要求することは打ち碎かれ、表層的なものになっている。というのも全ての犠牲を要求することに対して人は不安を覚えるからである。(…) いわゆる シオニスト的に物を考える広範囲の青年たちにとって、シオニズムというものはバーゼル・プログラムへの帰依によって十分に汲み尽くされたことになっている。(しかし実際は) そのプログラムの内容の全ては (…) 副次的な事柄なのである。これを越えて努力することの全ては、数人の激情家の極端な行動ということになる。これがシオニズムを軽いものにしようとしてきた道がもたらした成果であり結果である。Tb. 322

青年たちは指導者たちの偽シオニズムの価値観を受け継ぎ、それに基づいてシオニズムを理解する。彼らは「シオニスト的に物を考え」ているつもりではいるが実際はシオニズムの実質的な意義を完全に誤解しているのである。彼らはバーゼル・プログラムに定められた本来のシオニズムにとっては「副次的な事柄」でしかない条項に携わり、それによってシオニズムが成就されるかのような錯覚

に陥っている。そして真のシオニズムを知る数少ない覚醒者たちの主張は「激情家の極端な行動」として排除するよう指導されている。ようするに青年運動の墮落は根本的にシオニストとしての教育の問題に集約されるのである。故にショーレムはユードントゥームへの「真実の献身」を手に入れる唯一の道として徹底的な「学び直し (umlernen) Tb. 515」を彼らに要請する。これが『ユダヤ人青年運動』の結論として提示される混乱の解決策、ヘブライ語の学習なのである。

3 ヘブライ語の学習と「全体性」の達成

ヘブライ語への帰依は、(…)ヘブライ化していない青年運動は今日ではもはや考えられないという認識と結びつけられはしなかった。(…)青年運動への帰依から、たとえそれが副次的なものとしてであったとしても、ヘブライ語の学習に取りかかるまでに我々のところではいかに長い期間を要したかを確認することは統計学者にとって痛ましい課題となるであろう。(…)そのような青年たちの中でユードントゥームの全体性と内容の充実が生み出され得ないことは確かである。Tb. 516

本来ヘブライ語の学習はバーゼル・プログラムに組み込まれた一条項であった。「副次的な事柄」の集大成であるこのプログラムの中でこの条項は唯一価値のあるものであったとショーレムはみなしていた。しかし、青年組織はこの条項に賛同はしたものの、実際にはこれに取り組む努力を怠っていた。確かにヘブライ語の習得は容易な課題ではない。ショーレム自身はすでにヘブライ語を自由に操れるようになっていたかもしれないが、そうすることの出来るゆとりと才能はごく限られた人たちにしか与えられてはいなかったし、ましてヘブライ語を第二の母語として学び直せなどと本気で主張するのであったなら、シオニズムは新たなエリート主義を導入する危険にさらされるであろう。『ユダヤ人青年運動』が公になったとき、真っ先にこうした反論が持ち上がったことは想像に難くない。

だが、ここでのショーレムの主張は決して青年たちにイスラエルへの移住の準備を強要するものではなかったし、新しい母語の習得のために全てを犠牲にせよという過激な命令でもなかった。むしろ彼の意図するところは、運動の「全体性」の実現および「ユードントゥームの全体性と内容の充実を生み出」すに際して要求される内的犠牲は本来決して多大なものではあり得ないということにあったように思われる。

実際のところ『ユダヤ人青年運動』の中ではショーレムのこうした真意は十分に汲み取れるものにはなっていない。ここではただ「全体性」は青年たちのヘブライ語への共通の取り組みによって実現するという結論だけが記されており、要求の背後に隠された精神的なものの背景は何一つ明確にされてはいないのである。それが明らかにされるのは『ユダヤ人青年運動』の草稿が書かれてから四ヵ月後の1916年10月9日、ジークフリート・レーマン宛の書簡においてである。この書簡には「ユードントゥームの全体性」に関する彼の考えがまとめられており、そこからヘブライ語の学習は単なる要求の簡素化などではなく、ショーレム自身のこれまでの体験と思想の発展から導き出されたユードン

トゥーム理解の一つの帰結であったことが分かるのである。

レーマンは貧しい東欧ユダヤ人の子供たちのための教育センターとして組織されたユダヤ人民族ホームの若き指導者であった。東欧のユダヤ人にとってユダヤの伝統は未だ生命力を失っておらず、彼らの生活様式はなおもそれに深く根ざしたものであったので、比較的良質のシオニスト意識をもったドイツ系ユダヤ人青年たちが彼らとの交流を通じてユーデントゥームの実体に触れようとこの施設に集まって来ていた。そのため期待された運動はこの場所から生まれ出るに違いないとショーレムは確信していた (Vgl. Tb. 310)。

しかし、ショーレムの期待は裏切られてしまう。レーマンのユーデントゥーム理解は他の運動の指導者同様にブーバーの著作の無批判な寄せ集めに過ぎず、そこには彼自身の積極的な働きかけによって到達した結論は一切含まれていないことに気がついたからである。ショーレムはこのことにいたく激怒し、受け売りのユダヤ観を掲げることを止め、その代わりにヘブライ語を学ぶよう彼に要求したのだった²⁰⁾。ここに紹介する書簡はこの事件の直後のものである。

私はユーデントゥームの全体性 (Totalität)²¹⁾ というものが極めて内的に本質的な事柄を含んでいることを知っています。例えばブーバーは地上のユーデントゥームへの嫌悪としてのみ辛うじて近似的に暗示され得るような恐ろしく根深い理由からこうした事柄については言及しないのです。Br. 47

もしトーラーを知らなければ、トーラーの本質は理解されません。神の業を知らなければ、ユダヤの神概念は理解も体験もされません。しかし神の行為こそが伝統なのです。つまりそれはトーラーのことです。(…) ユーデントゥームの真に生き生きとした生命としてトーラーを理解することは効力のある更新の最初の前提事項なのです。Br. 48

ブーバーはユーデントゥームではありません。(…) トーラーの流れの総計がユーデントゥームの全体性の意味です。私はブーバーをひとりのユダヤ人であると考え、彼の歴史哲学を誤ったものとみなしています。(…) 内的な準備が整えば、つまりトーラーを学んだ後に、ユーデントゥームの全体性を見ることが出来るのです。Br. 49.

この書簡から分かるようにかつてブーバーの信奉者であったショーレムは今では彼のユダヤ観を誤ったものであるとみなすようになっていた。ブーバーはユダヤ教の神秘主義的な潮流を地下のユダヤ教とみなし、公的な「地上のユーデントゥーム」へと Sehnsucht を供給する「宗教心」の貯蔵庫としてその歴史的機能を称賛した。しかしショーレムはこの解釈が「地上のユーデントゥーム」に対するブーバー自身の「嫌悪」の現れに過ぎず²¹⁾、歴史的な見地からは決して正当化され得るものではないとここで結論づける。

ブーバーはラビ主義から今日に至るユダヤ教の正統的な潮流をユーデントゥームを硬直させた形骸的な潮流として嫌悪していた。彼にとってユダヤの伝統はこの嫌悪すべき潮流と固く結びついたもの

であったので、理想とされる未来のユダヤ世界は伝統とは切り離されたところで展開されるべきであった。彼の主観的な価値観は本物のユダヤ教と偽りのユダヤ教という区別を生み出し、本物のユダヤ教はユダヤの「宗教性」という形で伝統の枠組みとは異なる範疇で、つまり神秘主義的な潮流と原始ユダヤ教の時代に想定されることになった。つまり、現代のユダヤ人が回帰すべきユダヤ精神の本質というブーバーの概念は歴史的現実を組みするものではないのである。ショーレムはブーバーの著作を再読し、彼の理解に隠された極めて主観的な解釈基盤を確認したのである。『ユーデントゥームについての三つの講演』を読んだ際の感動はもはや薄れ、それに代わってショーレムの心中には彼の体験を通じて新しいユダヤ観が形成されていた²³⁾。

この書簡の中でショーレムはブーバーの業績に対し否定的な見解を明確にしてはいるものの、ユダヤの原典に向かう彼の生き方にはそれなりの敬意を払っているように思われる。彼はブーバーがはるかな過去より受け継がれてきたユダヤの伝統の一部に組することを「ひとりのユダヤ人」という言葉によって強調している。確かにブーバー個人はユーデントゥームと同一ではない。一人のユダヤ人の視点から間接的にユダヤの精神史全体を概観しようとする態度はそれ自体本質への誤解でしかなく、拒絶されるべきであろう。

ショーレムにとってユーデントゥームというものはある特定の人物や潮流によって規定され得るものでもなければ、ある価値観によって分類され得るものでもない。それはモーセの時代から現在に至るまでのユダヤ史の総体を包括する大きな流れのようなものである。換言すれば神の言葉を巡る解釈の積み重ね、伝統の真実へ迫ろうとする諸学者たちの研究の積み重ねがユーデントゥームの歴史的「全体性」を形成している。『旅の観察』で自然の永遠の営みが古い素材の受け渡しによって成り立っていたように、様々な種類の解釈者や研究者たちがそれぞれの時代の課題を果たし次の世代へと伝統を受け継いできた。ここではブーバーですら伝統の解釈者としてトーラーの流れの総計を構成する一員とみなされるのである。

ショーレムはこの伝統の流れの総体こそが理解されるべきであるとレーマンに要請する。その唯一の方法はトーラーを学ぶことである。彼の言うトーラーとは聖書の「モーセ五書」を直接指しているのではなく、トーラーの解釈者たちの手になるユダヤ教原典全体を意味している。ヘブライ語を駆使しこれらの原典に取り組む者は、様々な諸力が作用し合う伝統の彩り鮮やかな世界に触れることが出来るだろう。この体験が彼の存在を「全体性」としてのユーデントゥームの流れの一部に組み入れるのである。

『ユダヤ人青年運動』でショーレムが要求するヘブライ語の学習はユーデントゥームの形態に関するこのような理解の産物であったと考えられる。彼が青年たちに求めるものは他人の声によって惑わされることのない伝統への誠実な働きかけ、ヘブライ語を学ぶことによって自らをこの伝統の一部とする者の「真実の献身」である。ユダヤ教原典を紐解く者は、伝統の広大さと華やかさに心を打たれ、献身への決意をますます強めることだろう。世代間を超えて繰り広げられる解釈者たちの対話に耳を傾けると、彼らと伝統の間には長い間一方的に閉ざされてきた精神の交流が再開するであろう。そ

の結果、過去の総体と切り離され現代に孤立した生は再び民族の過去へと結びつけられ、拡大された新たな伝統の「全体性」、連続性がここに成立する。そしてこれに伴って共通の体験を軸に共通の価値と使命をになった運動の「全体性」が現在の局面においても生み出される。つまりヘブライ語の学習がもたらすであろう「全体性」は、断絶した個々人間の結びつきと失われた世代間の絆を同時に回復させ得るものなのである。だからこそショーレムはヘブライ語を学び、トーラーを理解しようとする青年たちの意気込みを「効力のある更新の最初の前提条件」とみなしているのである。

初めてユダヤの原典に触れた際に覚えたショーレムの感動はここにおいて明確に「更新」の概念と結びつき、本来あるべき場所へと青年たちを救済するための道具を提供する。ヘブライ語の学習を通じてのユードントゥームの「全体性」の回復。これが『ユダヤ人青年運動』でショーレムが出した結論である。そこには過激派シオニストの夢想から引き出された実現不可能な要求はない。ヘブライ語の学習は、たとえそれが「副次的な事柄」としてであれ実行されるのであれば、青年たちが自らの体験を通じてユダヤの伝統を理解しそれへの帰属意識を高めるための助けとなるのである。それは現実的に決して不可能なことではなかったし、シオニズムの基本理念に即した混乱の解決策でもあった。それ故ここでの彼の主張は青年組織に加わる一部の者たちの目を開かせることが出来たのである。『ユダヤ人青年運動』が公にされるやいなやショーレムと青年組織の指導者たちとの間には激しい論争が引き起こされることになる。この論争の結果、ショーレムに啓発された Blau-Weiss の青年リーダーと一般メンバーの一部はこの組織を去り、その結果 Blau-Weiss の創立者たちは政策の改善を余儀なくされた²⁴⁾。

『旅の観察』から『ユダヤ人青年運動』の草稿に至る二年あまりの歳月は彼の思考に論理的な分析と筋道を与えた。『旅の観察』での「一体であれ」という命令は彼自身の思考の遍歴の末に民族を救済する具体的なプログラムを成立させる。それは青年たちの心を動かすのに十分な毅然としたシオニズム思想を基盤としていた。『旅の観察』の中で暗示的に関連しあっていたシオニスト精神の覚醒、ヘブライ語の学習、ブーバーから受け継がれた「更新」と Sehnsucht の諸概念は『ユダヤ人青年運動』において「全体性」という一つの概念のもとに結集し、ショーレム自身の思考に統一をもたらした。神秘的な興奮とユードントゥームへの情熱から紡ぎ出された思考の断片に彼は確かな内的関連を与え、それを材料に独自のシオニズムの建造物を打ち立てたのである。そしてこれによってショーレムはシオニズム思想家として認知されるための第一歩を踏み出したのである。

【註】

一次文献の出典

『旅の観察と旅の思考 (Reisebeobachtungen und Reisegedanken)』: *Tagebücher Aufsätze und Entwürfe 1913-1917*, Hrsg. v. Karlfried Gründer u. Friedrich Niewöhner, Frankfurt a. M., 1995, S. 27-38.

この記述はショーレムが彼の母に連れられてスイスに旅行し、当地で第一次世界対戦の勃発を知った際に執筆されたものと思われる。ゲルショム・ショーレム、『ベルリンからエルサレムへ』、岡部 仁訳、法政大学出版局、1991年、21頁参照。

『ユダヤ人青年運動 (Die jüdische Jugendbewegung)』: *Tagebücher*, S. 511-517.

『ユダヤ人青年運動』は最初ブーバーが編集していた「ユダヤ人」誌 (*Der Jude*, eine Monatschrift, I Jg. 1916/17 H/12 [März 1917]) に掲載され、後に日記に再録された。

ショーレムの日記と手紙からの出典は本文中に記号で示した。手紙は Br., 日記は Tb. である。手紙は *Briefe Bd. 1 1914-1947*, Hrsg. v. Itta Shedletzky, München 1994. を使用した。またショーレムの著作等からの引用部では特定の部位を強調するために下線を引いた。

英語文献はドイツ語文献と同様の形式で出典を明らかにした。

- 1) 拙論『若き日のショーレム 1914年の日記に見る思想形成』(明治大学大学院研究論集第8号 1998年 205-226頁)において『旅の観察と旅の思考』をすでに考察している。本論ではこの考察をより明瞭な形にまとめ、これより後に成立した彼の論文と関連づける。
- 2) デヴィッド・ピアール,『カバラーと反歴史』, 木村光司訳, 晶文社, 1984年。ショーレムの反戦運動ならびに公的シオニズムへの批判の大きな成り行きは107-117頁。
- 3) Weiner, Hannah: *Gershom Scholem and the Jung Juda Youth Group in Berlin, 1913-1918* In: *Studies in Zionism* v. 1, n. 1 Spring 1984 S. 24-42. 『ユダヤ人青年運動』については S. 34-36
- 4) Mosse L. George: *Gershom Scholem as a German Jew* In: *Modern Judaism* v. 10 n. 2 1990, S. 117-133. ショーレムの青年期については特に S. 117-125.
- 5) Buber, Martin: *Drei Rede über das Judentum*, Frankfurt a. M. 1920.
- 6) ebd., S. 61f.
- 7) 初期のブーバーもニーチェに感化された者の一人である。ブーバーのユダヤ観は彼自身の哲学的な取り組みから派生したもので、それは個別化した個々人と無限の領域との接触をテーマとしていた。このテーマはショーペンハウアーとニーチェから受け継がれたものである。Vgl. Mendes-Flohr, Paul: *From Mysticism to Dialogue*, Wayne State Uni. Press Detroit, 1989, S. 52-54 u. S. 62f.
- 8) Buber, Martin: a. a. O., S. 71.
- 9) ebd., Sehnsucht に関しては S. 75-78. Religiosität に関しては S. 79f. 私のここでのブーバーの解釈は, Mendes-Flohr, Paul: a. a. O. S.70-71. に基づいている。
- 10) ゲルショム・ショーレム,『ベルリンからエルサレムへ』, 50頁。
- 11) 同書 45頁。
- 12) ブーバーのユデントゥーム理解への文献学的な反駁はショーレム自身の手によってなされた。直接ブーバーを批判したものは「マルティン・ブーバーのハシディズム理解」(『ユダヤ主義の本質』, 高尾利数訳, 河出書房新社, 1972年, 139-176頁)と「マルティン・ブーバーのユダヤ教理解」(『ユダヤ主義と西欧』, 高尾利数訳, 河出書房新社, 1973年, 137-195)である。
- 13) Mendes-Flohr, Paul: a. a. O., S. 92-97.
- 14) 1914年12月19日にショーレムはブーバーの講演「宮潔め」(Buber, Martin: *Tempelweihe* In: *Die jüdische Bewegung* 1900-1914, Berlin, 1920, S. 229-242)を聴き, そこでブーバーの戦争に対する考えを知った。だが, それ以前の12月7日にすでに彼はブーバーのユデントゥーム理解に疑念を抱いていた。Vgl. Tb. 72.
- 15) *Die Blau-Weisse Brille Nr. 1-Nr. 3* 戦時中の検閲のためゲリラ的に発行された同人誌。手書きの原稿をショーレムの父親が経営する印刷所で許可なく印刷したもので, 公には出回らなかった。これらに掲載されたショーレムの記述は現在日記 (Tb. 289-301) に再録されている。
- 16) ドイツ青年運動からユダヤ人青年運動が分離した背景に関しては Laquer, Walter: *The German Youth Movement and the 'Jewish Question'* In: *Leo Baeck Institute Year Book* (LBIY) IV, 1961, S. 193-205. h. S. 193-200. また青年シオニスト運動の成立と歴史に関しては Gross, Walter: *The Zionist Students' Movement* In: LBIY IV, 1959, S. 143-164. S. 145f. 及び S. 151には Blau-Weiss の成立について記されている。ピアールの

前掲書98頁から107頁でも同様の事柄が扱われている。

- 17) Weiner, Hannah: a. a. O., S. 31.
- 18) 例えば Blau-Weiss の実力者カール・グラザーはショーレムの意見に基本的には共感しており、組織の改革に尽力した。しかし、彼はショーレムの思想を危険なものと考えていた。ebd. S. 38.
- 19) ゲルショム・ショーレム、『ベルリンからエルサレムへ』64, 65頁参照。
- 20) 同書。民族ホームとレーマンに関しては82, 83頁、レーマンとの口論に関しては85頁参照。
- 21) ショーレムは自分自身の思考から「全体性」の概念を発見したが、後からそれがベンヤミンの言う Totalität と同一のものであることがわかった。Ganzheit はベンヤミンの概念をシオニズムの思想に則して翻訳したものである。Vgl. Tb. 321.

ショーレムは自らが導き出した概念がマルクス主義や、当時勢力を伸ばしつつあった社会主義思想との関連で理解されることを恐れ、公の場では敢えて Ganzheit という語を採用したのではないだろうか。手紙のような個人的な記述においてはこの両者は区別なく使用されているものと考えられる。

- 22) 「地上のユデントゥームへの嫌悪」。ブーバーの死後、ショーレムは彼のユダヤ理解をやはり同様の表現を用いて分析している。それによるとブーバーが敵視したものは、みなぎっていた生気を奪い取る形式主義的な諸力、二元論によって均等化された無味乾燥した世界であった。それは現在のヨーロッパ人全てがさらされている個の原子化、正統的なユダヤ教が貫いてきた律法主義によって裁断された世界であった。ブーバーにとってユダヤの伝統は民族の生命力を抑圧してきた嫌悪すべき諸力の連続でしかなかった。民族の生命力は歴史の表層には現れない潮流によって保たれその開放のためには伝統と手を切る必要があるとブーバーは考えていた。ゲルショム・ショーレム、「マルティン・ブーバーのユダヤ教理解」、141頁、及び148-144頁参照。

ブーバーのユダヤ観へのショーレムの批判がすでに1916年の時点で基礎づけられていたことが1916年10月26日のエドガー・ブルーム宛の書簡からも分かる。そこでショーレムはブーバーを「ユダヤ的」ではなく、むしろ「近代的」と述べている。彼はこの年の夏ブーバーについて熟考し、ブーバーのユダヤ観がユダヤ的とは呼べない「近代的」な思想体系によって支えられていること、そしてそのために彼と彼の信奉者たちの目線がユダヤ的な問題としてのシオンの再建に向けられることはないであろうことを理解していた。Vgl. Br. 55

- 23) ショーレムが独自のユダヤ観を形成した背景には彼自身の熱心なヘブライ語学習の他にベンヤミンの影響があったものと思われる。ショーレムは彼から歴史哲学に関する知識を吸収していたし、ベンヤミン自身ブーバーの見解には否定的だった。Vgl. Tb. 142.
- 24) Blau-Weiss はショーレムとの論争後数年間はショーレムの気に入った方向に改善されていった。しかしそれも長くは続かなかった。ピアールの前掲書122頁。

Gershom · G. Scholem Von der “Erneuerung” zur “Ganzheit”

Takehiko ISHIHARA

In dem 1917 publizierten Aufsatz “*Die jüdische Jugendbewegung*” richtet sich Gershom Scholem an die Jugendgeneration, die seiner Meinung nach das Ziel des Zionismus aus den Augen verloren hat. In Deutschland gehörten damals viele jungen Zionisten zu den Organisationen, die Jüdische Jugendbewegung genannt wurden. Aus Scholems Sicht waren sie jedoch nichts weiter als pseudozionistisch und er warf ihren Mitgliedern mangelnde Konsequenz und mangelnde Verantwortung für die Zukunft vor: Wegen ihrer Angst, die durch Kompromisse mit den Deutschen gewonnene Bequemlichkeit zu verlieren, könnten sie die erhoffte Jugendbewegung nicht hervorbringen. Um die Verwirrung des Zionismus zu überwinden, propagierte er ihnen den Begriff ‘Ganzheit’, ‘Ganzheit der Bewegung’.

In Ansätzen taucht der Begriff der Ganzheit schon in seinem frühesten, 1914 entstandenen Essay “*Reisebeobachtungen und Reisegedanken*” auf, einem dichterischen Aufsatz, der v.a. auch das Erwachen des zionistischen Bewusstseins beschreibt. Es findet sich darin die Forderung Scholems an seine Kameraden, auf ihren Wegen ‘ganz ungeteilt’ zu sein, sich ‘mit dem Geiste rücksichtsloser Strenge’ zu erneuern, damit sie in der Tiefe ihrer eigenen Seele das verborgene ‘Zeichen der Ewigkeit’, das ererbte Eigentum, entdecken könnten.

Diese Forderung wird in “*Die jüdische Jugendbewegung*” zum Begriff ‘Ganzheit’ erweitert, die durch ein konkretes Programm zu realisieren sei. Er fordert von der Jugendgeneration vor allem das Studium des Hebräischen, damit sie sich mit der ‘Sehnsucht’ nach dem Wiederaufbau des Zions erneuern und vereinigt auf das einzige Ziel hin marschieren könnten.

Dieser Anspruch wird häufig als Beispiel für seinen utopischen Radikalismus angeführt. In dieser Arbeit soll er jedoch vielmehr als eine aus seiner objektiven Betrachtung über Zionismus und Judentum gezogene Konsequenz angesehen werden.

Scholem sah in den ununterbrochenen Überlieferungen, die die Wahrheit der Tora hatten offenbaren wollen, das Wesen der Tradition. Die Lektüre der hebräischen Originale als gemeinsame Arbeit bietet den zerteilten Individuen eine Gelegenheit, als Bestandteil des Judentums in die ‘Ganzheit’ der Tradition hineinzuströmen. Die Hingabe ans Hebräische stellt die einzige Vorbedingung nicht nur für die gezielte Bewegung, sondern auch für die Verbindung des gegenwärtigen Juden mit seiner Vergangenheit dar. Vor diesem Hintergrund sind der Anspruch und die Forderungen Scholems zu sehen.